



料紙箱



硯箱

28 伊勢物語図詩絵料紙箱・硯箱 一具

江戸時代(十九世紀)
 (料紙箱)三三・〇×四一・〇 高一三・六
 (硯箱)二三・八×二五・六 高五・二

一具として伝わる本品は、意匠の主題が『伊勢物語』第九段である点では同様であるが、本来は一具ではない前例をもとにして制作された作例と考えられる。いずれも意匠を芦手絵として和歌の一部の文字が挿入されている。すなわち料紙箱は、蓋表と側面に、「八橋の和歌」から衣きつ、なれにしつましあれば はるばるきぬる旅をしぞ思ふの文字の一部が表される。また硯箱には、蓋表に「するがなるうつの山辺にうつ、にもゆめにも人にあはぬなりけり」の一部が表さ

れている。

料紙箱は、十七世紀に加賀藩主・前田利常に招かれて仕え、加賀詩絵の祖となった五十嵐道甫作と伝える「八橋詩絵茶箱」が本作の先例と考えられる。八橋詩絵茶箱は、方形、総体を黒漆塗とし、蓋表から四側面にかけて、八橋と水辺に咲く燕子花、その間で遊ぶ鷺や鶺鴒などの水鳥、沢瀉などの水草や岩などを、詩絵、詩暈、付描、切金、そして多色によく光る螺鈿の技法を用いて、細かく表現している。それに対し、本料紙箱は、八橋と水辺に咲く燕子花は同様ながら、鷺はより写實的、八橋の手前には田甫に続く土手を表現し、そこには柳と柏の樹が生え、土手には手前短側面に続く田に水を取り入れるための水門、田には稲苗が育ち、鳥追いの仕掛けが表現されるなど、いわゆる八橋の描写以上の意匠となっている。しかし、高詩絵、詩暈、付描、切金、輝く螺鈿と、技法としては加賀詩絵の特徴が表れている。因みに蓋裏は、やはり物語の中の富士山を主題としている。

一方の硯箱は、田村長兵衛作「角田川詩絵硯箱」(東京国立博物館所蔵)が前例となる。特に蓋表の意匠は近似し、総体を黒漆として、楓を大きく表現して葛を点在させ、山道の土手に立て掛けるように結び文を載せた笈を、沃懸地、高詩絵、詩暈、切金、螺鈿の技法によって表す。蓋裏、身内部は長兵衛作と同様に、物語の中の角田川を取り上げ、長兵衛の図様とはやや異なる角田川を表している。

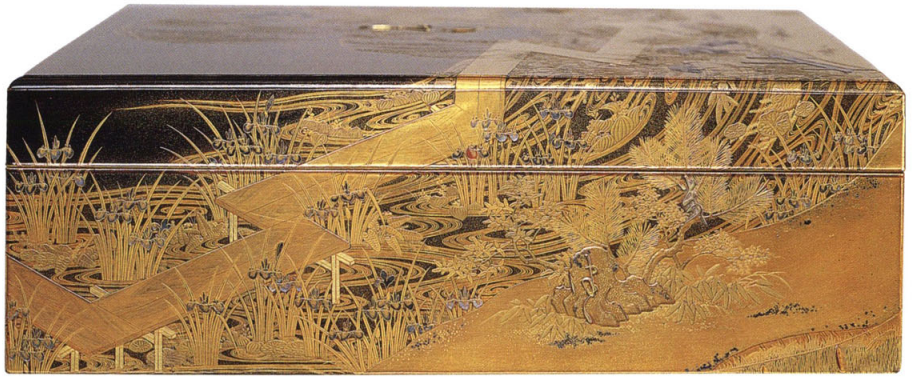
制作者は、とりわけ料紙箱に特徴がよく出ている加賀詩絵の作家と想定されるが、特定は出来ない。しかし、道甫以来、八橋の図様は伝統的に伝わり、また長兵衛の図様も室町以来の伝統的なものと考えられていることから、これらを前例として、より写實的、裝飾的な同図様を展開した作例として捉えられる。



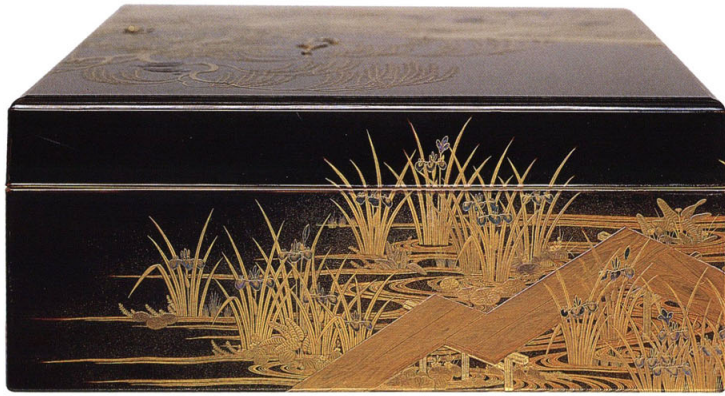
料紙箱蓋表



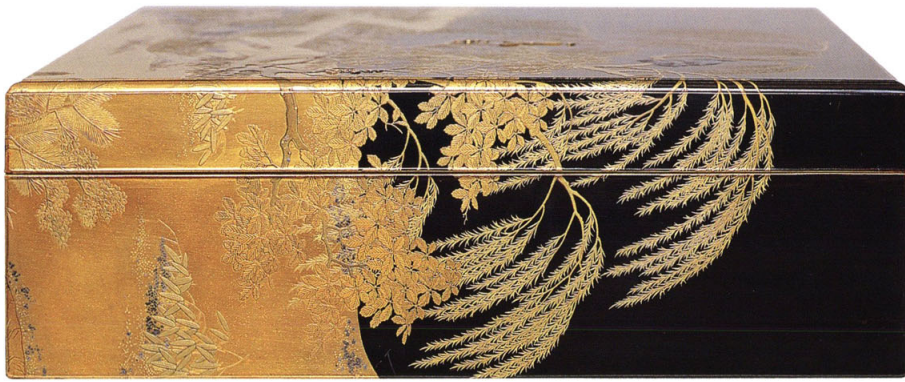
硯箱蓋表



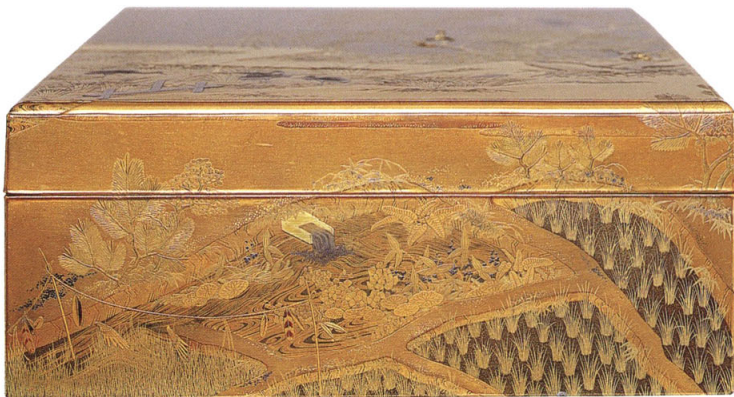
料紙箱側面①



料紙箱側面②



料紙箱側面③



料紙箱側面④

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

江戸の美意識 ― 絵画意匠の伝統と展開

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 28

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十四年三月二十六日発行

© 2002. Museum of the Imperial Collections